

令和7年度
第3回入間市文化財保護審議委員会
<次 第>

日 時 令和8年3月12日(木)
午後2時～4時
会 場 博物館 会議室

1 開 会

2 挨 拶

3 議 題

「旧石川組製糸西洋館保存活用計画」の改定について

[資料 P.1～]

4 報 告

(1) 市指定文化財「藤沢橋石造物群」の追加指定について

(2) 旧黒須銀行復元改修事業の進捗状況について

(3) 国登録有形文化財候補建造物の意見具申について

(4) その他

5 その他

6 閉 会

旧石川組製糸西洋館 保存活用計画

第2回からの修正点

文言は 赤色

文意を変えず修正 青色

(改定案)



令和〇年〇月〇日

入間市教育委員会

凡例

・本文中の「復原」とは、痕跡や資料等の明確な根拠に基づき当初の状態に復することを意味し、「復元」とは明確な物理的痕跡は残っていないが蓋然性が高い復旧を意味する言葉として使用した

・会社名については変遷があるため、一番最後に使われていた「石川組製糸所」を採用した

※共進社石川製糸場(明治45年)→合名会社石川組(明治45年)→株式会社石川組製糸所(大正12年)

・建造物の名称については国の登録文化財として登録された「旧石川組製糸西洋館」とした

・部屋の名称については、おおむね平成 11 年に行った「黒須西洋館建造物(旧石川組製糸西洋館)調査報告書」の表記に従ったが、一部変更したものがある。平成 11 年以降に改装された部屋についてはカッコ内に現状の名称を入れ、「旧和室(女子トイレ)」のように表記した。

キャプション位置の統一

図・写真 下の中央 ゴシック

表 上の左寄せ ゴシック

表紙写真: 西洋館本館屋根及び別館内部等改修工事竣工写真(平成 29 年度)

※電柱・電線は加工で消してあります

目 次

1 計画の作成
(1) 作成年月日	
(2) 作成者	
(3) 計画期間	
(4) 行政計画との関係	
(5) 計画の趣旨	
2 施設の概要
(1) 名称	
(2) 所有者・管理者	
(3) 所在地	
(4) 建築年	
(5) 敷地面積	
(6) 施設内容	
(7) 計画の対象とする区域	
(8) 文化財の指定等	
(9) 登録時の解説	
3 現在までの経過
4 旧石川組製糸西洋館の概説
(1)旧石川組製糸西洋館の概要	
(2)建造物について	
(3)外構について	
(4)旧石川組製糸西洋館の本質的価値	
5 基本方針
6 保存管理計画
(1)保存の現状と課題	
①保存管理	
②環境保全	
③防災防犯	
(2)保存方針	

①対象となる範囲	
②基本方針	
③保存管理区分	
(3)建造物の保存計画	
①部分・部位	
②管理計画	
③修理計画	
(4)外構の保存計画	
(5)管理計画	
7 環境保全計画
(1)基本方針	
(2)管理計画 修理計画	
8 防災・防犯計画
(1)防火	
(2)防犯	
(3)耐震・耐風対策	
9 活用計画
(1)活用の現状と課題	
(2)活用方針	
(3)活用内容	
10 保護に関する諸手続き
11 管理運営
(1)所管	
(2)公開の対応	
(3)撮影への貸出対応	
12 計画の実現に向けて
(1)保存と活用について	
(2)運営体制について	
(3)財源の確保について	
(4)周辺文化財及び他の施設・機関との連携について	

1 計画の作成

- (1) 作成年月日 平成 30 年 (2018) 1 月 31 日
令和〇年 (2026) 〇月〇日 改定

〇は、教育委員会での決定日をいれます

- (2) 作成者 入間市教育委員会 (博物館)
(平成 30 年 (2018)、令和●年 (●))

- (3) 計画期間 令和●年 (●) ●月●日～令和●年 (●) ●月●日の 10 年間

(4) 行政計画との関係

本市「第 6 次入間市総合計画・後期基本計画」において、近代化遺産の保存・活用として西洋館は改修を実施したうえで一般公開を行い、地域の歴史を知る場や観光スポットとして市の魅力を発信するとされています。「入間市教育振興基本計画」でも、計画的な修繕を行い保存を図るとともに、同じく近代建築物である市指定文化財「旧黒須銀行」と一体となった魅力ある活用事業を実施し、市民文化の向上や観光の振興に繋げていくとしており、「第 2 期入間市博物館基本計画」では、一般公開や撮影への貸出等の活用を図りながら、文化財としての保存に取り組んでいくとしています。

「入間市都市計画マスタープラン」では「豊岡地域」のまちづくりにおいて、西洋館や旧黒須銀行、武蔵豊岡教会などの歴史的建造物がある地域については、景観の保全と活用を図るとされており、「第三次入間市環境基本計画」では、歴史・文化を大切に景観の保全として、旧石川組製糸西洋館、旧黒須銀行などの近代化遺産の保存、魅力ある活用事業に取り組むとされています。

また、令和 2 (2020) 年 3 月に策定された「埼玉県文化財保存活用大綱」では目指すべき方向性と取組として、文化財の適切な保存・活用が位置付けられており、計画的に保存 (耐震含む) 修理や復元整備を実施し文化財等を活用した魅力ある地域づくりに繋げるとあります。

(5) 計画の趣旨

旧石川組製糸西洋館 (以下、「西洋館」という。) は、明治から昭和初期にかけて当地方の産業を牽引する存在であった「石川組製糸所」を象徴する文化遺産です。

石川組製糸所は、明治 26 年 (1893) に石川幾太郎が創始した会社で、生糸の生産・販売を通して経営規模を拡大し、最盛期には全国に 9 工場を有し、出荷高でも全国第 6 位になりました。生糸は主に外国に輸出しており、西洋館は取引先の外国人をもてなすために大正 10 年 (1921) 頃に建てられた迎賓館とされています。しかし、繁栄を謳歌していた石川組製糸所も、関東大震災による損失や昭和初期の金融恐慌、生糸に替わる化学繊維の誕生等の複合的な要因により業績を悪化させ、昭和 12 年 (1937) に解散してしまったことから、石

川組製糸所を示す遺構はほとんど残っていません。

このような中、西洋館は石川組製糸所の繁栄を示すモニュメントとして、また入間市の近代史を象徴する文化遺産として非常に貴重な存在です。

さらに、建築学上も優れた建物として「国土の歴史的景観に寄与しているもの」であることから、国登録有形文化財（平成13年11月20日に「本館」「別館」のそれぞれが登録）になっています。

平成15年に所有者より市に建物が寄贈され管理・運営を行ってきましたが、経年劣化により様々な箇所に損傷が見られるとともに、寄贈された当初は本館で雨漏りが頻繁に発生するなど建物自体の保存が最大の課題となっていました。また、活用に必要な設備も不足していることから、それまでの活用は試行的・限定的なものに留まっていました。

このような中で平成29年度には国の「地方創生拠点整備交付金」を活用することで、懸案事項であった本館屋根の改修工事の実施と、併せて活用に必要な施設の整備を行いました。さらに今後の西洋館の保存と活用を図っていくための指針として、「旧石川組製糸西洋館保存活用計画」を策定し、平成30年度からは一般公開や各種事業の実施など、本格的な活用を開始しています。

しかし、今後も恒久的な管理・運営を行うに当たり、石川組製糸所営業期の姿への復原や、平成29年度にはできなかった部分の修理、耐震化工事を実施する必要があることから、計画の改定を行ったものです。

なお、策定にあたっては、令和6年11月に市文化財保護審議委員会に諮問し、令和●年●月に答申を受けました。

2 施設の概要

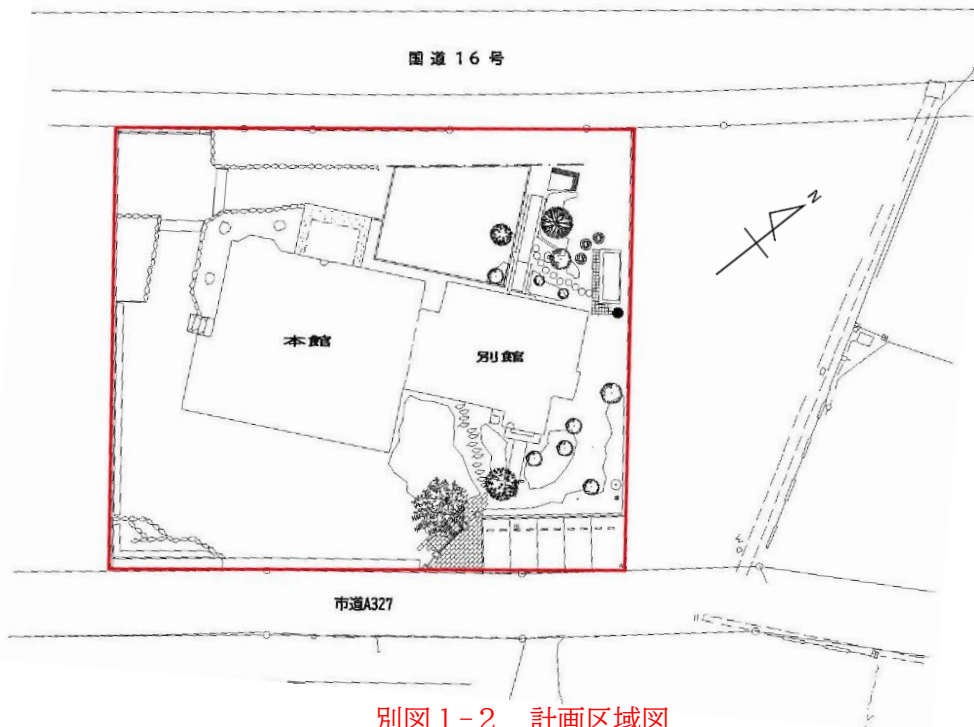
- (1) 名称 旧石川組製糸西洋館 本館・別館
- (2) 所有者及び管理者
所有者 入間市（入間市豊岡一丁目16番1号）
管理者 入間市教育委員会博物館（入間市二本木100）
- (3) 所在地 埼玉県入間市河原町13番13号
- (4) 建築年 大正10年（1921）7月7日上棟
- (5) 敷地面積 1,876 m²
- (6) 施設内容 本館 建築面積 301 m²
（木造2階建。一部地下1階。外壁 化粧タイル張り。屋根 洋瓦葺）
別館 建築面積 149 m²
（木造平屋建。外壁 化粧タイル張り。屋根 棧瓦葺き）
- (7) 計画の対象とする区域
旧石川組製糸西洋館の敷地（1,876 m²） 別図1-1、1-2参照
- (8) 文化財の指定等 本館 国登録有形文化財（建造物）
平成13年（2001）11月20日登録 登録番号11-0037号
別館 国登録有形文化財（建造物）
平成13年（2001）11月20日登録 登録番号11-0038号
- (9) 登録時の解説

近代における埼玉県内屈指の製糸会社の迎賓施設で、設計を室岡惣七として大正10年に建設された。木造2階建ての本館が北面して建ち、東に平屋建ての別館が接続し、ともにセピア色の化粧煉瓦張りで調和がとれている。本館の外観は屋根窓を設けた変化のある屋根に特色があり、別館とともに当地域の近代の景観を今に伝えている。





別図 1-1 位置図



別図 1-2 計画区域図

3 現在までの経過

年	内容
明治 26 年 (1893)	石川幾太郎、座繰り製糸による操業開始
明治 27 年 (1894)	器械製糸に転換。共進社石川製糸場と称する
明治 45 年 (1912)	合名会社石川組設立
大正 10 年 (1921)	西洋館上棟 (7 月)。石川幾太郎が武蔵野鉄道第 3 代社長に就任
大正 12 年 (1923)	株式会社石川組製糸所と改称。横浜生糸出荷番付で全国 6 位。
○年から昭和 5 年の間	東京環状線により北側の敷地が削られる
昭和 12 年 (1937)	株式会社石川組製糸所 解散
昭和 16 年 (1941)	西洋館が陸軍士官学校校長の宿舎となる
昭和 23 年 (1948)	石川源一郎が別館の北側に茶室を新築 (5 月) (平成 15 年解体) 西洋館が進駐軍に接収される (複数の将校が居住)
昭和 33 年 (1958)	西洋館が米軍から石川家に返却
昭和 54 年 (1979)	埼玉県教育委員会編『埼玉県明治建造物緊急調査報告書』に掲載
昭和 55 年 (1980)	日本建築学会編『日本近代建築総覧』に掲載
平成 6 年 (1994)	西洋館が入間市景観 50 選に選定
平成 8 年 (1996)	埼玉県教育委員会編『埼玉県の近代化遺産－近代化遺産総合調査報告書－』に掲載 (3 次調査対象)
平成 11 年 (1999)	入間市による建造物調査で「黒須西洋館建造物 (旧石川組製糸西洋館) 調査報告書」(榊文化財工学研究所) がまとめられる
平成 13 年 (2001)	「旧石川組製糸西洋館 本館・別館」が国の登録有形文化財に登録
平成 14 年 (2002)	市博物館が石川源一郎の茶室を調査(翌年の博物館紀要で報告) 石川本家と親族により『石川家の人々』が刊行される
平成 15 年 (2003)	所有者から市へ建物の寄贈を受け、用地を取得する 西洋館活用事業開始 (建物公開、撮影への貸出等)
平成 16 年 (2004)	市教育委員会生涯学習部で「旧石川組製糸西洋館」保存活用基本 構想及び「旧石川組製糸西洋館」改修計画を策定 「西洋館保存活用基本設計」作成
平成 17 年 (2005)	「西洋館外構工事実施設計」作成
平成 20 年 (2008)	市文化財保護審議委員会より市教育委員会へ「旧石川組製糸西洋館の活用について (答申)」が出される
平成 29 年 (2017)	西洋館本館屋根及び別館等改修工事を実施 (平成 29 年 7 月～30

	<p>年3月。国の「地方創生拠点整備事業交付金」</p> <p>市文化財保護審議委員会から「旧石川組製糸西洋館保存活用計画（案）」に係る意見を聴取する</p> <p>埼玉県教育委員会による『埼玉県の近代和風建築－埼玉県近代和風建築総合調査報告書』に掲載（3次調査対象）</p> <p>市博物館で特別展「石川組製糸ものがたり」開催</p>
平成30年（2018）	<p>市教育委員会で「旧石川組製糸西洋館保存活用計画」を策定</p> <p>「入間市旧石川組製糸西洋館条例」「同施行規則」を施行</p> <p>一般公開を開始。7月7日を「入間市西洋館の日」に制定</p>
令和8年（2026）	<p>市教育委員会で「旧石川組製糸西洋館保存活用計画」改定が策定</p>

※市が行った工事については、6保存管理計画(1)保存管理であげる

※石川家・行政以外の動きとして下記のものがある

昭和●年（ ） 入間市立豊岡中学校染井佳夫教諭による石川製糸調査と教材発表

平成10年（1998） 東海大学第二工学部建設工学科学生による卒業論文の調査（羽生修二教授）

4 旧石川組製糸西洋館の概説（文化財の概要）

(1)石川組製糸西洋館の概要

①石川組の歴史

明治時代、群馬・長野・福島に次ぐ主要養蚕県であった埼玉県では、大正末期から昭和初期にかけて養蚕業が最盛期を迎えた。石川組製糸所は、日本の製糸業が家内工業的な座繰り製糸から近代的な器械製糸へと転換する時期に創業した。

明治26年（1893）、入間郡豊岡町黒須（現入間市）において石川幾太郎が小規模な座繰り製糸を開始し、翌年にはいち早く器械製糸へ転換した。日清・日露戦争を経て釜数を増やし、第一次世界大戦後の好景気に乗じて経営規模を急拡大させた。最盛期には入間市内3工場をはじめ、県内の狭山・川越、県外では福島・愛知・三重・福岡など全国に9工場を有し、大正11年（1922）の横浜への生糸出荷高では全国6位を記録している。

大正年間、埼玉県内の生糸産額は二倍以上に増加したが、その牽引役は生産性の高い器械製糸工場であった。当時、500釜以上の大規模工場は県内に13あったが、石川組以外は主に県中央・北部に立地する信州資本等の県外経営であった。このことから、県西部の地元資本である石川組の存在は、県の蚕糸業において特筆すべきものであったといえる。

さらに石川組は、高品質な生糸や優良蚕種の普及、労働環境の整備においても模範工場として知られ、明治42年には競進社と共に大日本蚕糸会の優等賞を受賞している。

特に労働環境については、幾太郎の弟・和助の影響で一族がキリスト教に入信したことから、経営や従業員教育にキリスト教精神が色濃く反映されていた。過酷な労働を排し、家庭夜学校や日曜学校を開設するなど、慈愛に満ちた雇用形態が保たれていたのである。

また、豊水橋架橋への寄附や関東大震災被災者救援のトラック提供など、地域への慈善活動も積極的に行った。

しかし、関東大震災による横浜での生糸焼失や昭和恐慌、レーヨンなど化学繊維の台頭により需要が減少し、経営は悪化。昭和12年（1937）に解散したと考えられている。

本店工場は埼玉繊維への事業移管を経て、昭和13年に郡是製糸に買収されたが、その跡地は現在UR黒須団地となっている。石川本家ではその後、豊岡治具ゲージ（後に豊岡飛行機製作所）を立ち上げ、終戦後は豊岡物産株式会社に改組した。主に進駐軍の業務を請け負い業績を伸ばしたが、現在は後継会社はない。なお、この間、西洋館は平成15年まで石川本家が所有していた。

現在、石川組関連の建物は市外には残っておらず、市内には本店工場の事務所を曳家した幾太郎の息子・権吉（洋行）の母屋、権吉が建てた3階建ての繭倉庫、幾太郎の娘で女工総監督を務めたつめ（新道）の住宅が残るのみである。会社としての最盛期に建設され、本家に残された唯一の建物であるこの西洋館は、極めて貴重な遺産である。

元号	西暦	石川組製糸所の動き	国内外の動き
明治26	1893	石川幾太郎、座繰製糸による操業開始。釜数20	富岡製糸場民間に 払下げ
明治27	1894	蒸気力による機械製糸に転換。釜数35 共進社石川製糸場と称する。	日清戦争（～ 1895）
明治34	1901	「新家工場（第2工場）」開設。釜数40	
明治36	1903	川越の御法川工場を借り操業。 石川組製糸所と改称	
明治37	1904	軍用乾燥野菜を製造して陸軍へ納品	日露戦争（～ 1905）
明治41	1908	「川越工場（第3工場）」開設。釜数 260	
明治 42	1909	大日本蚕糸会埼玉支会第2回品評会で蚕糸優等 賞受賞 石川幾太郎、埼玉県の産業功労賞受賞	
明治44	1911	本店工場に電話開設（豊岡3番）	豊岡町内に電話開 通
明治45 （大正1）	1912	合名会社石川組設立。総窯数 985 陸軍特別大演習（川越）に際して勅諭を伝達される	
大正2	1913	石川幾太郎、大日本蚕糸会の第一種功績賞受賞	豊岡町内に電灯が ともる
大正3	1914	福島県の「原町工場」操業開始（賃貸契約）	第一次世界大戦 （～1919）
大正4	1915	「入間川工場（第4工場）」操業開始 「扇町屋工場（第5工場）」操業開始	武蔵野鉄道開通・ 豊岡町駅開業
大正5	1916	本店新工場、倉庫、大講堂を建築 「扇町屋工場（第5工場）」、「原町工場（第6工場）」 を買収	
大正6	1917	石川幾太郎、緑綬褒章受章	
大正7	1918	愛知県の「豊橋工場（第7工場）」を買収	シベリア出兵
大正9	1920	合名会社を株式組織に改める	糸価未曾有の高騰
大正10	1921	三重県に「石川組中村製糸所（第8工場）」を開設 『西洋館』上棟（1922～23年頃完成）7月 石川幾太郎、武蔵野鉄道第3代社長就任（～昭和 4年） 石川幾太郎、紺綬褒章受章	ワシントン軍縮会議
大正11	1922	海軍大将東郷平八郎来訪	
大正12	1923	株式会社石川組製糸所と改称 大正11年度横浜生糸出荷高で全国6位を記録 武蔵豊岡教会新会堂献堂	関東大震災→横浜 の石川組の生糸 1,000 梱が焼失

大正15 (昭和1)	1926	池袋に東京事務所開設	生糸相場暴落
昭和3	1928	米国チニーブラザーズ社のチニー氏来訪	為替相場激変
昭和4	1929	従業員数 5,260 名(男 456 名、女 4,804 名)	世界恐慌始まる
昭和5	1930	経営苦境に陥る 福岡県粕屋郡席内村(現在の福岡県古賀市)に工場開設	ロンドン軍縮会議
昭和6	1931	各工場の整理が始まる	満州事変
昭和9	1934	石川幾太郎永眠(行年78歳)	
昭和12	1937	株式会社石川組製糸所 解散	日中戦争始まる
昭和13	1938	本店工場 郡是製糸が買収。2代目社長民三永眠(行年 57 歳)	

②施主 石川幾太郎 安政2年(1855)～昭和9年(1934)

石川幾太郎は、浮き沈みの激しい製糸業界の中で、石川組製糸所を日本屈指の大会社へと発展させた実業家である。

安政2年(1855)、石川金右衛門・だいの長男として黒須村(現入間市黒須)で生まれた。生家は8代続く農家であった。若い頃は畑仕事の傍ら新河岸(現川越市)への馬曳きなどで働き、村の名望家・繁田武平(満義)の私塾で学んだと伝わる。

戸主となった明治12年(1879)、実業界への飛躍を志し製茶仲買商となった。一時経営に失敗したというが、同26年のコロンビア博覧会(シカゴ万博)では茶で褒賞を受けており、茶業は後年まで続けている。

明治23年、弟・和助の影響でキリスト教に入信。同26年には石川組製糸所を創業した。同42年に県より産業功労賞を受賞。大正元年(1912)の陸軍特別大演習では、川越に行幸した大正天皇より地方功労者としてお言葉(勅諭)を賜り、同2年には渋沢栄一らと共に大日本蚕糸会の第一種功績賞を受けている。

大正10年、武蔵野鉄道(現西武鉄道)社長に就任。同13年には西川武十郎(現志木市)に次ぎ県下第2位の大地主(211町歩)となった。また、同6年に緑綬褒章、同10年に紺綬褒章を受章している。昭和9年(1934)没、行年78歳。

息子の権吉によれば「勤儉力行型で物を大切に、事業には極めて研究熱心。事業の鬼というだけでなく、常に人間尊重を忘れなかった」という。刀剣や書画骨董を愛し、多くの著名人や文化人とも交流があった。土木、消防、教育等を支援し、郷土への利益還元にも尽力した。日本キリスト教団武蔵豊岡教会(大正12年・W.M.ヴォーリズ設計)の建設にあたって、石川家同族会とともに多額の寄附を行っている。



石川幾太郎(撮影年不明)

4(2)建造物について

建物の調査については、平成 10 年(1998)に入間市が株式会社文化財工学研究所に委託して作成した『黒須西洋館建造物(旧石川組製糸西洋館)調査報告書』(以下、「報告書」という)、および報告書を基に齊藤祐司(当時入間市教育委員会社会教育課主幹)が執筆した「旧石川組製糸西洋館建物について」(『入間市博物館紀要第 9 号』2011)がある。本項では、これらをもとに行った追加調査を踏まえ、概要を述べる。

① 旧石川組製糸西洋館の沿革

ア. 建物について

西洋館には棟札が残されており(写真●)、設計は室岡惣七、施工は関根平蔵、大正 10 年(1921)7 月に上棟したことが判明している。室岡は大正 7 年 9 月に司法省技師を退職し、同 10 年に東京電灯株式会社へ技師として入社している。設計はこの頃に行われた可能性があるが、建築関連の図面や契約書は見つかっていないため正確な設計時期は不明である。

竣工時期の記録はないが、大正 11 年 3 月に東郷平八郎が来訪した際、西洋館ではなく本店工場の大講堂に宿泊したと伝わることから、当時はまだ使用できる状態にはなかったと考えられる。規模から考えて大正 12 年 9 月の関東大震災前にはできあがっていたと思われる。

建築の目的は、創業者石川幾太郎が「外国商人を招くための迎賓館」として建てたとされる。当時、石川組はニューヨーク五番街に支店を持ち、取引先の外国人貿易商を宿泊させるために建設したとの伝承がある。しかし実際には、輸出は横浜の商社を経由しており、ニューヨーク支店が存在した記録は確認されていない。

一方で、幾太郎らが将来的な直貿易を構想していたという口伝が記録されている。甥の石川東洋を三井銀行から引き抜いてコロンビア大学へ留学させ、欧州で見聞を広めさせると共に、新築する西洋館のための大理石や調度品の購入を任せたとする。こうした直貿易への布石が、支店存在の伝承に繋がった可能性がある。

実際に、昭和3年(1928)には米国の絹織物大手チニー・ブラザーズ社(※注)のウィリアム・C・チニーが来訪したことが、芳名帳や写真から確認できる。直取引の構想は経営環境の変化により実現しなかったと思われるが、西洋館は当初の計画通り迎賓施設として機能したといえる。

石川家には大正 7 年から平成 10 年(1998)までの芳名帳(市指定文化財)が 2 冊残されており、約 280 名の記帳があることから、多くの来客を迎える状況があったことが分かる。

西洋館本館は居住用ではなく、社長の幾太郎や 2 代目の民三は本店工場内の建物に居住していた。幾太郎は西洋館別館の隣に日本家屋を新築して隠居所としている。通称「ヒラヤ」と呼ばれた別館も住宅機能はなく、台所(厨房)など本館の迎賓機能を支えるバックヤードとして、同時に建設されたと考えられる。

西洋館上棟の頃は石川組の絶頂期であったが、昭和に入ると関東大震災や昭和恐慌の影響を受け、昭和 12 年頃に会社は解散した。その後、西洋館は同 13 年に豊岡へ移転してきた陸軍航空士官学校の校長宿舎として利用されるようになった。利用開始が同 16～17年からの説があり、その場合は同16年 9 月就任の第 3 代校長木下敏から最後の第 6 代徳川好敏まで貸与されたことになる。この際、別館の改修が行われたという。一方、戦時中も 2 階和室で石川家の子女が茶道を習っていたとの証言もあり、貸与は部分的だった可能性もある。

敗戦後、航空士官学校が進駐軍に接收されジョンソン基地となると、昭和 23 年頃から西洋館も接收され、

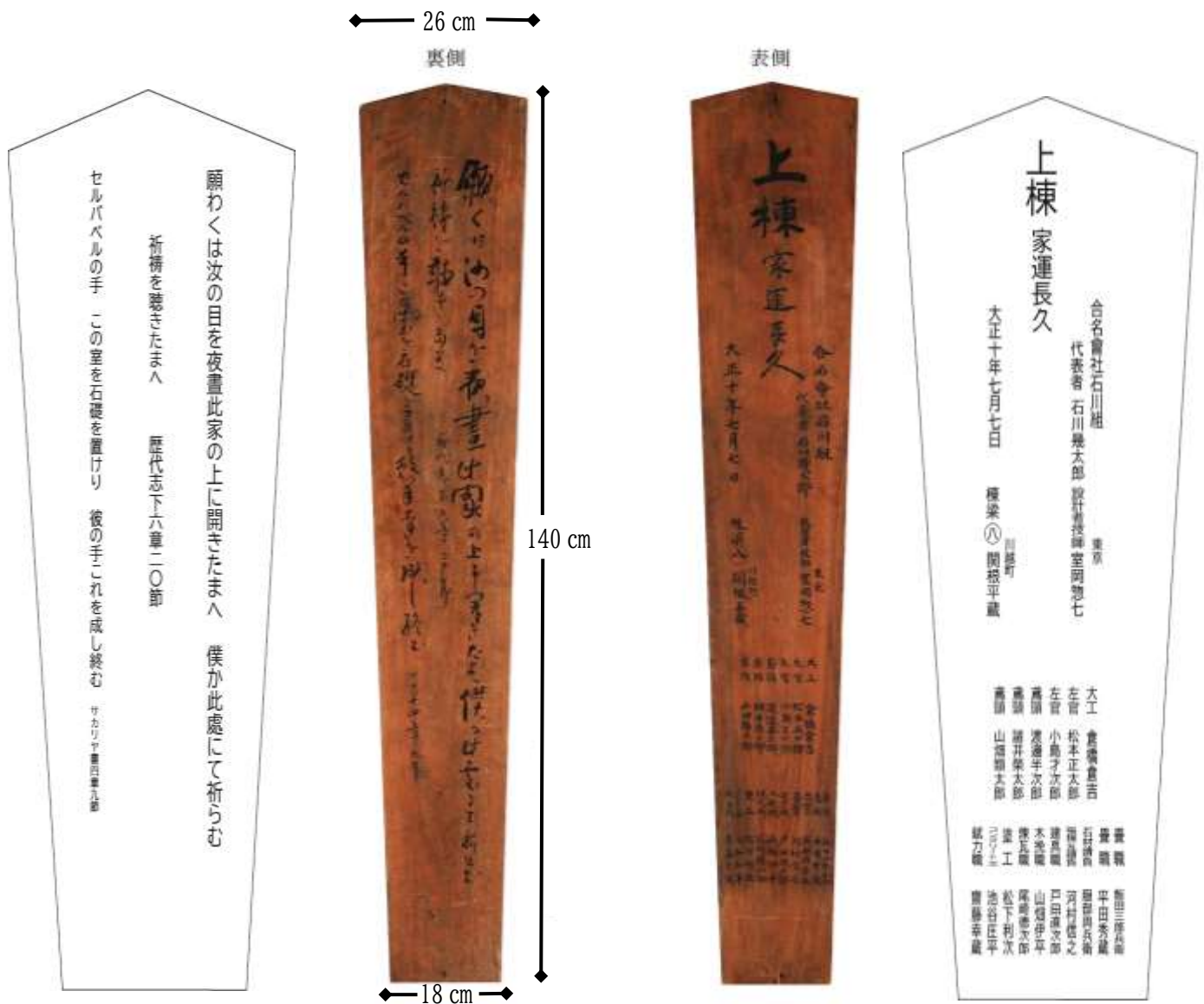
副司令官ら高級将校の官舎となった。同 33 年の返還までに、3 家族が居住できるよう改造が加えられたが、別館の一部は貸与していなかった可能性がある(図●参照)。

昭和 33 年の返還後、改造された一部は復旧されたが完全ではなかった。その後、平成 15 年(2003)まで石川本家が維持管理を行った。この間、家族は隣接住宅に住みつつ、一部を居宅としても使用した。

平成 13 年 11 月 20 日、国の登録有形文化財(建造物)に登録され、同 15 年 9 月 8 日、所有者の石川本家より建物が市へ寄贈、敷地は市が購入し、入間市の所有・管理となった。

※注

チニー・ブラザーズ(Cheney Brothers):コネチカット州マンチェスターに拠点を置いた、アメリカ最大級の絹織物製造会社。芳名帳には「Willam.C.Cheney」とあるが、石川家では「アメリカの貿易商チェニー社長」と伝承されていた。



写真● 西洋館の棟札

②配置と庭園について

原稿イメージ

・配置

当家の立地は、武蔵野台地を河川が削った河岸段丘のたもとに形成された小規模な段丘面に位置しており、北西側は霞川の作った低地に、南西側は段丘崖に面している。

敷地は、国道 16 号に沿った長方形の形をしており、国道側は約◇m奥行約◇mである

両隣は民地であるがかつては当家の敷地であった。背後は、市道 A327 号線に面している。

建物は、敷地の中央に、北より東側に 45 度強振れている。これは、国道開設前の旧の道路の線形に沿っていた可能性がある。

国道側は、約 1.2m 低く、コンクリートの擁壁になっている。その南隅部よりアプローチするが現在は簡単なバリカーとチェーンにて仕切っている。ここより砂利敷きのスロープを登って玄関ポーチへと向かうが、建物の南西隅部に石積でもって敷地差を補っているもののやや無理がある。当初のアプローチは玄関の北東からだった。

市道は南から北に向かって下がっており、南側は、コンクリートパネルの擁壁によって土留めとされ、メッシュフェンスで仕切っている。北側はほぼ敷地に近い高さになっており、市によって令和 2 年度に来館者用駐車場が整備され、これに接して旧石材を用いて同年に移築された門が立っている。

民地との境界は、北東側でメッシュフェンスとし、南西側もメッシュフェンスである。

建屋の国道側は砂利敷きの広場になっており、かつて、昭和 23 年に建てられて別館から渡り廊下で続く茶室があったが平成 15 年に解体された。その後、鉄骨造の駐車場棟が建てられたが、それも解体された。

市所有になってから、国道沿いにマツやマキなどを、市道沿いにベニバナトキワマンサクを植え修景した。

南西側民地には池を配した庭園、北東側民地には、幾太郎の隠居所として 2 階建ての日本家屋(通称シンチク)があり、別館と渡り廊下で繋がっていた。さらにその隣に 2 階建ての土蔵が建っていた。

<以下続く>

・庭園

庭園の中心は池で、段丘崖の湧水を水源とする小川を敷地に引き込んで 3m ほどの滝で落とし、敷地内の湧き水も引いていた。池の中央付近まで花崗岩の眼鏡橋がかけられ、緋鯉が飼われていた。池の周囲には築山や松がある芝生、遊歩道、イチョウ、そして茶室があった。南と西の一段高いところには、灯籠・土橋や通称アズマヤという建物があり、ここに茶室が 2 棟あったという伝えもある。この灯籠は大きなもので、スイッチで電気が点るようになっていた。

庭園は西洋館を建てる時に一緒に作ったものと言われており、庭師が京都の有名な庭園を視察して作ったとか、茶室を作るにあたっては、幾太郎と、武蔵豊岡教会の牧師で茶の湯の師でもあった神戸壬四郎の二人が金閣寺や南禅寺を見学に行ったなどの言伝えがある。

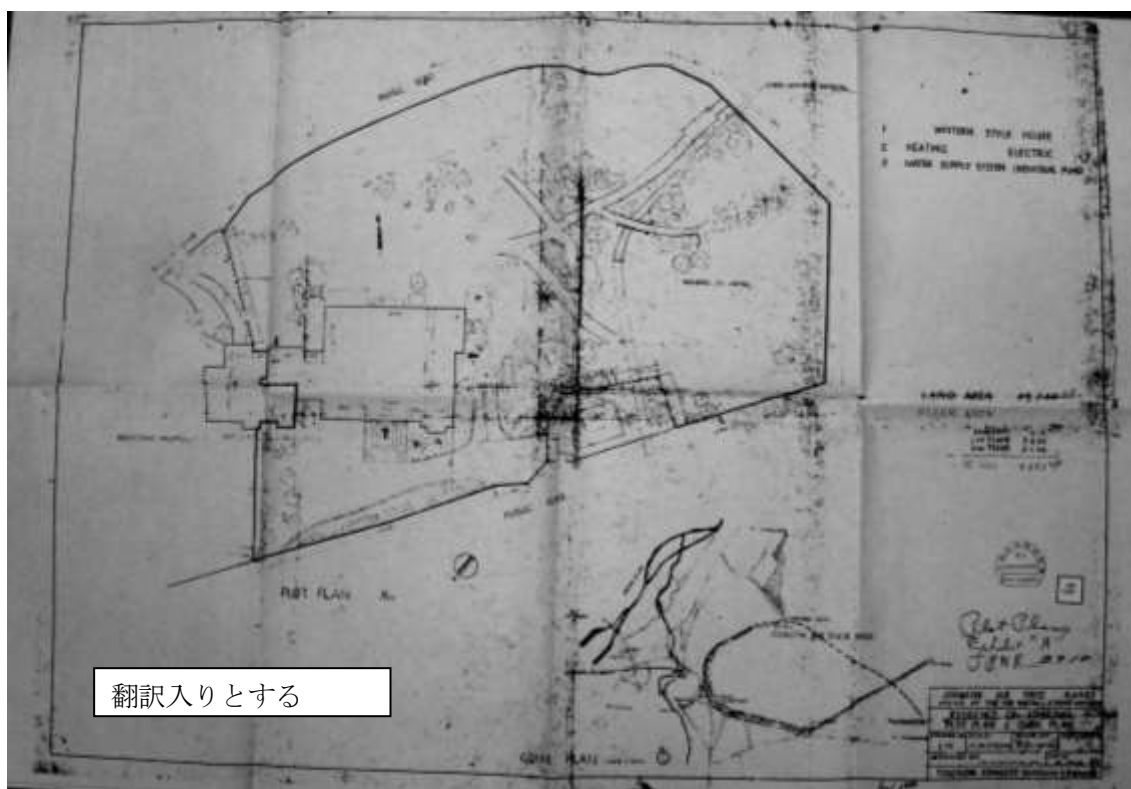
なお茶室は昭和 11～13 年頃、鶴ノ木工場跡地に移築し、20 年まで豊岡治具ゲージ製作所、後に豊岡飛行機製作所の社宅として使用されたというのが現在は残っていない。

・石川組解散後の建物・庭園

「石川家土地台帳」の分析によると、昭和 11～12 年に個人名義の宅地約 1,000 坪を残し、全ての不動産が処分されている。これは石川組の解散時期であることから借金の返済に充てたと考えられるが、土地だけでなく

庭園に付属する建物や眼鏡橋などの石材等が処分されたことも推測される。進駐軍に建物を貸した時に作成されたと考えられる配置図(図●)では、貸借に関係ない部分が省かれている可能性はあるものの、池がかなり小さく書かれており、当初の庭園の姿はすでに崩れていた可能性がある。昭和23年の航空写真でも池らしきものは読みとれない(写真●)。

2代目社長民三の息子源一郎は、昭和23年に、敷地の北東、別館の向かい側に3畳台目の茶室を新築し、露地を眺めている。源一郎がどの程度茶の湯に関心があったか定かではないが、経営していた豊岡物産株式会社が進駐軍関連の仕事で非常に好調だったことが影響していると考えられ、迎賓的用途に使われたとみられる。茶室は渡り廊下で別館の10畳和室(茶室に改装されている)の横の廊下につながっていた。茶室に接続して源一郎家の住宅もつくられた。シンチクは、昭和20年頃はあったという証言があるが、昭和23年の航空写真には認められないので、茶室・露地と住宅の新築に伴って撤去されたのかもしれない。茶室と住宅は、国道16号拡幅のため撤去されたが、記録調査が行われており、ここで使われた灯籠や蹲、敷石などの石材も一部残っている。



図● 進駐軍改修図面 配置図

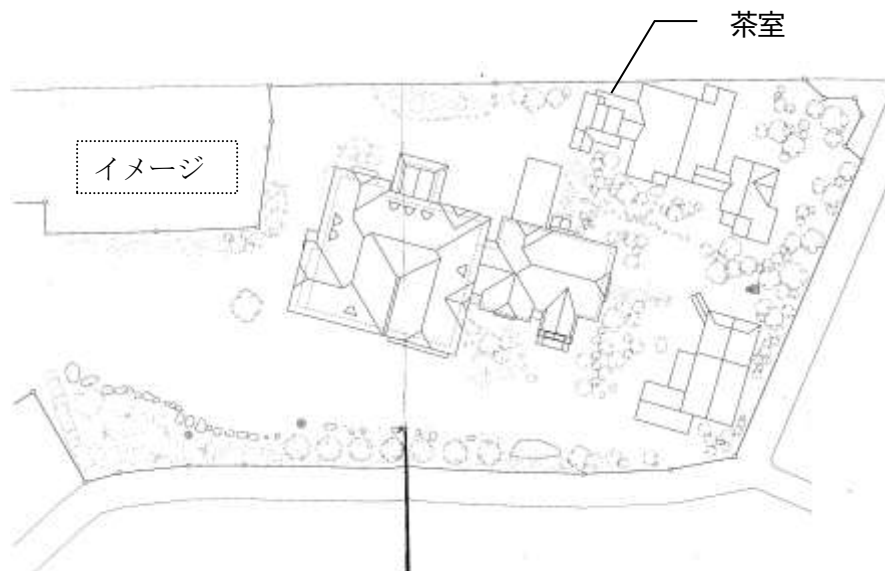
【付録に入れる】

市内根岸の中島家(屋号大東)にある灯籠:写真あり

京都の道標(江戸時代?):写真なし?

巨大な石臼(中世?):写真なし?

南西角の花壇には灯籠:写真なし?



図● 石川源一郎氏が建てた茶室解体前の配置図 平成14年(2002)7月

③旧石川組製糸西洋館の特徴

石川西洋館は、登録有形文化財として本館と別館に分かれているが、建築物として、2階建ての本館と1階建ての別館は一体の構造である。石川本家の石川嘉彦氏によると、建築も同時に行われたと聞いているとのことである。

この建物の外観と規模は以下のとおりである。

本館：木造2階建・外壁煉瓦小口タイル張・屋根洋瓦葺

延べ面積 1階 281.72㎡

2階 287.86㎡

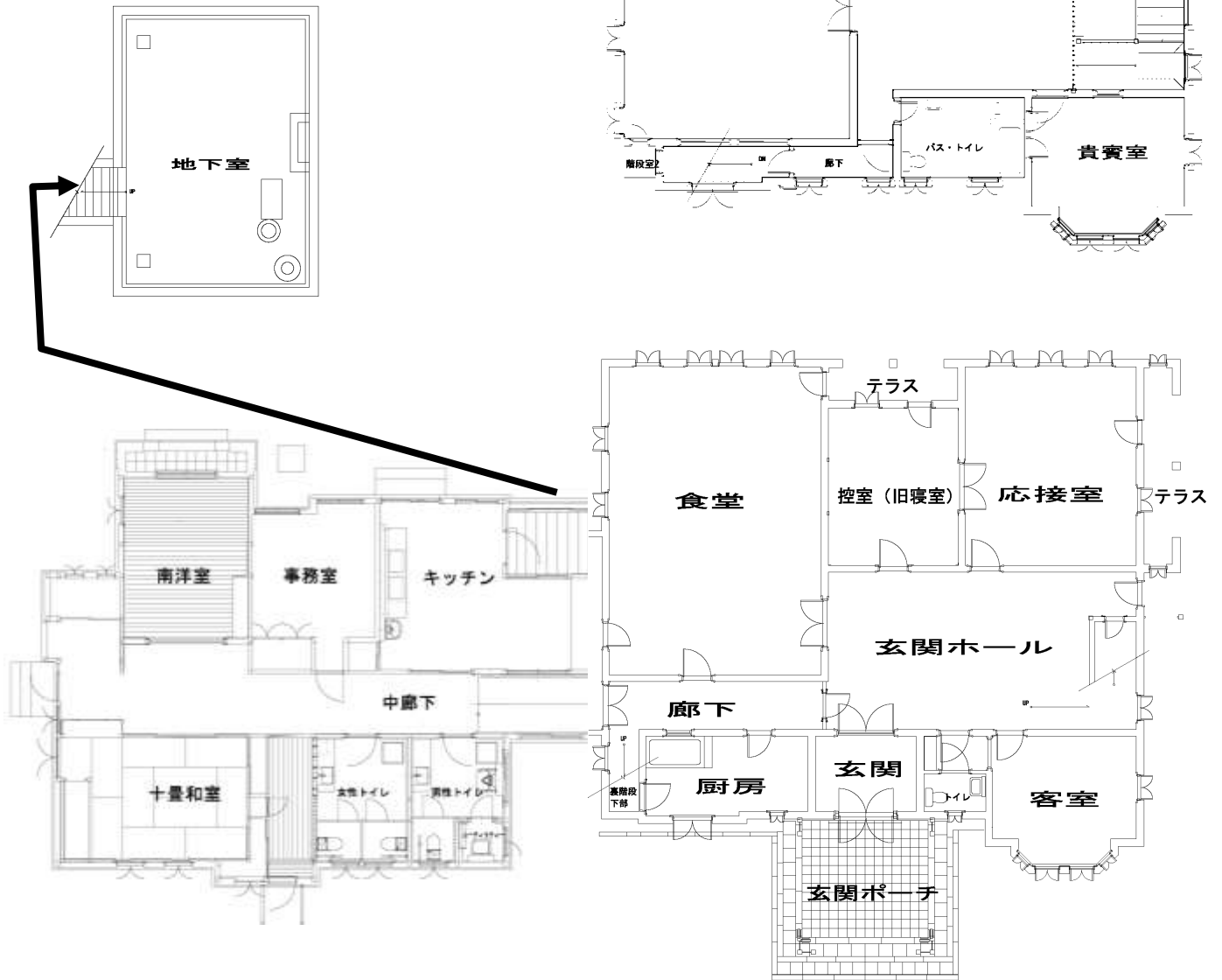
地下 76.03㎡

別館：木造1階建・外壁煉瓦小口タイル張・屋根棧瓦葺

延べ面積 1階 148.76㎡

現況平面図

部屋名は仮



本館と別館では客を直接迎える表の機能と客を迎えるための準備を行う裏の機能に分かれている。このため、部屋の配置にこれが表れている。しかしながら、本館、別館とも進駐軍将校宿舎として改造を受けるなどして、現在もその跡が残っている。この創建当時から現在まで改造の変遷を平面図(図●、図●)にした。

ここに復元平面図 挿入

『黒須西洋館建造物(旧石川組製糸西洋館)調査報告書』平成 11 年文化財工学研究所より

ア 本館について

建物は、正方形に近い矩形をしており、かつ、次に述べるように複雑な屋根架構をしている。しかし、小屋伏の調査をしていないため、本論では、平成 11 年度の調査報告書に基き、玄関がある側を梁間方向、交差するほう方向を桁行方向とする。なお、この方向は、もっとも高い棟を基準としたと思われる。

○外観

・屋根形状

屋根は半切妻造りを基本とし、主棟をくど造りのようにコの字型にすることにより、見上げた際の屋根のボリュームを低減させている。谷は、南東側に開いているが、幸いなことに室内側に大きな漏水の跡は見られない。各面には、必ず半切妻とドーマウインドウが置かれている。現在、青い洋瓦が葺かれているが、昭和 50 年代頃に葺き替えられたもので、当初はスレートが葺かれていた。

・北西面

玄関ポーチのある北西面が正面にあたるが、基本は寄棟造りとしながらも、貴賓室や客室という来賓用の主室がある南側を台形に張り出したベイウインドウとし、ここに向け主棟から下り棟をおろし、半切妻を正面に見せている。縦長の開口部も4か所ずつ設け開放的な空間を示している。一方北側は、ベイウインドウというほどではないが主たる壁面により○尺ほど張り出し、半切妻の破風を屋根上に付け足して、正面の対称性を高めている。さらに半円形のドーマウインドウを平面に3つ載せている。

壁面は濃褐色の煉瓦小口タイルを馬目地に張るが、ベイウインドウ部分はいも目地に張ることによって他と差別化を図っている。

開口部は縦長で、窓台、窓楣ともに白御影風の人造石研ぎ出し上げになっており、茶色一色の中に、横のラインとして入る。

玄関ポーチは、建物のほぼ中央に位置し、腰折れ屋根の入母屋造り妻入りで、現状は長尺鉄板で覆われているが、銅板葺きである。妻飾りは、縦棧が束状に4本立つだけでシンプルである。

この面は、一見対称性を見せながらも、室内の機能と外観の整合性を求めることによりわざと崩している。また、門からのアプローチを十分に意識したと思われるベイウインドウを強調した意匠と、奥の簡素な意匠の対比により訪れるものにダイナミズムも感じさせてくれる。

・南西面

南西面も、座敷や応接室のある東側、こちらには半切妻屋根を見せ正面性を高めている。そして、寄棟の平側を見せ、ドーマウインドウを2つ乗せる階段室や貴賓室客室のある西側に大きく分節されている。

西側は、階段室の明かり取りがアクセントになっているが、正面である北西面に比べ裏面的な控えめなデザインである。この1階に白色の塗装をした庇付きの出入口があるが、現在のものは後補である。

一方東側は、西側寄り3尺ほどせり出し、協調されている。2階は、2連の縦長窓、両脇に縦長窓が対象に配置されている。その1階は、白いタイル張りのポーチになっている。

<続く>

○内部

(各部屋の配置について200字程度記述する)

本館主要室の内部仕様と意匠

階	室名(仮)	床	壁	天井	その他
1階	玄関	彩色モザイクタイル張 階段:石材	漆喰塗 腰:大理石張	漆喰塗	ペンダント
	ホール (廊下)	寄木張(ヘリンボーン) 一部に絨毯敷	漆喰塗、腰:羽目板張	型押し鉄板(白ペンキ塗)	暖炉(大理石)、シャンデリア
	大階段	板敷(踊り場)、階段(樺材)	漆喰塗、羽目板壁	漆喰塗鏡天井	階段手摺(木製) 親柱(木製レリーフ付)
	客室	寄木張(周囲は矢羽根紋)	布張(絹布) 腰:羽目板張	漆喰塗鏡天井 周囲に木製デンティル(歯飾)	ペンダント
	応接室	絨毯敷 寄木張(周囲、菱形紋)	紙張(枠は絹布張) 腰:羽目板張	折上小組格天井(支絨)	カーテンボックス ペンダント
	控室 (旧寝室)	寄木張 カーペット敷	木造(真壁造)、張付壁(紙) 壁枠に雷紋(フレット)、蟻壁	変形格天井(紙張) 周囲:漆喰塗	ペンダント
	食堂	寄木張(ヘリンボーン、周囲は菱形紋)	布張(新規?) 腰:羽目板張	パネル天井(羽目板、漆喰塗)	木製カーテンレール ペンダント
2階	ホール	寄木張(ヘリンボーン) 一部に絨毯敷	漆喰塗、腰:羽目板張	漆喰塗鏡天井	シャンデリア
	貴賓室	寄木張、周囲は角形連続紋 絨毯敷	張付壁(絹布) 腰(一部):クロス張(新規)	張付天井(絹布、金泥塗) 周囲:組物(出組)、小組天井	シャンデリア カーテンボックス(木製)
	大広間	周囲は寄木張(雷紋) カーペット敷、下地はコルク材	張付壁(紙張) 腰:羽目板張	吹寄せ格天井、周囲:漆喰塗	スタンドグラス、ペンダント カーテンボックス(木製、布)

バルコニ ー	タイル張(チェッカー)	小口白タイル張 柱:小口煉瓦タイル張	漆喰塗鏡天井	手摺部分は改造 ペンダント
東和室	畳敷(12畳半)	張付壁(紙張)、四分之 (木製)	吹寄せ棹縁天井	クローゼットは改造
西和室	畳敷(12畳半) 床の間	張付壁(紙張)、四分之 (木製) 東和室境に透し彫板欄 間	吹寄せ棹縁天井	床の間(復元)、付書院 東和室境に透し彫板欄 間
入側 (和室廻 り)	寄木張(チェッカー)、薄 縁敷	紙張	板張、周囲を漆喰塗	

イ.別館について

○外観

別館は、本館裏面側に玄関を持つが、進駐軍による改造により現在は洋室となっている。詳しくは内部の項で述べていく。

屋根は、本館の洋瓦葺とは対照的に棧瓦葺で、鬼瓦を配する。鬼瓦には石川家の家紋である笹りんどうの紋が付けられている。

外壁は本館同様に小口煉瓦タイル張りである。テラゾー(研ぎ人造石)による柱形および蛇腹(コーニス、横帯)が壁面に配されている。

西洋建築には、横の帯は軒蛇腹、天井蛇腹、胴蛇腹として付けられるが、縦の帯はあまり見られない。

また、ドイツの木骨建築の外観の様式とも異なっている。

別館のテラゾーの帯の配置を見ると、柱、土台、腰長押、内法長押、桁の位置に設けられている。あたかも和風の木造真壁造りの壁を思わせるものである。

このように石川西洋館別館は、屋根、壁などの外観が、和の意匠を基に造られたものとなっている。

○内部

裏方の機能を持つ別館は、昭和16～17年頃の石川家による改造と、終戦後の進駐軍による改造を受けているため、創建当時の原形をほとんど留めておらず、わずかに南寝室に玄関の形状が残っているのみである。石川家の改造により「裏方」の機能から「住」と「迎賓(茶室)」の機能へ、さらに進駐軍の接収により「住」の機能へ変化している。

南洋室

本来別館の裏玄関であったが、進駐軍により土間部分に床を張られ洋室として改造された。

男性トイレ(旧浴室)

図 1 では、改造の変遷でも浴室と図示されているが、天井は竿縁天井であり、少なくとも進駐軍に接収される以前は、和室として使用されていたものと思われる。平成 29 年に男性トイレに変更した。

十畳和室

昭和 17 年頃の石川家による改造で造られた。十畳和室には炉が切られ茶室として使用されていた。

女性トイレ(旧六畳和室)

十畳和室と同様に昭和 17 年頃に改装されたと思われる。天井は竿縁天井である。平成 29 年に女性用トイレに変更した。

キッチン・南寝室

創建当時、この 2 部屋は一つの部屋であったと思われる。床は土間であった。現状では床を張り、天井も張り替えられ、当時の様子を留めていない。石川家による改造で、十畳和室・水屋に改造されたのと同じ昭和 17 年頃の改造と思われる。キッチンから地下室に出入りする階段がある。外側には煙突を備えている(この煙突がどこにつながっているのかは不明)ことから創建当時は厨房施設であった可能性がある。平成 29 年に改装した。

ウ.本館・別館の内部の特徴

内部は不明な点が多い別館と本館 2 階和室を除き、洋風の



写真 8 本館玄関

意匠以外に和風の意匠も取り入れられながらもすべて洋室である。このことは、外観と同様にこの建物が洋館であることを物語っている。

個々の意匠をみると、食堂パネル天井は、方形を

組み合わせた幾何学文となっている(写真 7)。また、客室スタンドガラスの照明をはじめとする各部屋の照明には、直線と半円形を組み合わせた模様が付けられている。本館玄関扉のガラス面には金属棒による直線・半円を組み合わ

せた模様が(写真 8)、南洋室(別館裏玄関)扉のガラス面には金属棒による直線の幾何学文が付けられている。

これらの意匠はアールデコを先取りしたものといわれていたが、時期的にアールデコではなく、セセッションとみなすのが適当である。

エ.建物の構造

建物構造は、目視によって確認すると非常に堅牢にできている。この建物の外壁は全面小口煉瓦タイル張りだが、木造であることから壁を堅牢にする必要があったと考えられる。木造でタイル張りはあまり例が無い。地震に対



写真 7 食堂天井

しても丈夫な壁にしていることは、関東大震災前の建物として先進性がみられる。

軸部、梁組、小屋組は比較的断面寸法の大きな部材が用いられている。小屋組み(写真9)は、木造トラスが採用されており、横揺れに強い洋小屋組みである。また、ボルトやプレートなどの補強金物が多用されており、天井吊り木まで金属棒が使用されている。

また通例、木摺の厚さが2分5厘から3分(7.5~9mm)、幅1寸5分(45mm)のところ、5寸角の柱に厚さ5分×幅3寸(15mm×91mm)の木摺を全面に打ち付けてい



写真9 本館小屋組み

る(写真10)。さらに、この木摺は斜め45度に打ち付けられており、筋交いの役割を兼ねている。これにタイル下地のモルタルが塗られているが、厚さが1寸(30mm)もあり、モルタルの中には鉄筋も入れられている。

これらによって、壁全体が一体化され構造的に強固なものとなっており、室岡の設計思想といえるものである。室岡の娘菊池公子氏によると、室岡の設計した建物を取り壊す時に堅牢すぎて手間が掛かるという話を聞いていたとのことである。



写真10 本館小屋組み

室岡の在学中、佐野利器らによる構造学派が勢力を増し、室岡の卒業後の大正4年には佐野により「家屋耐震構造論」が発表された。当時のこの先進的理論=建物の剛性を高める理論を取り入れたものであろう。

オ. 家具・照明器具の意匠について

西洋館に残されている家具や照明器具は、創建当時とは断定できないが当初のものも多く残されていると考えられる。家具の裏に西洋館が接收された時の番号「JPNR-2910」が記されているものがあり、これがあるものは少なくとも接收前からあったとみなせる。

室内の意匠、建具の意匠に共通の模様もあることから、建物と同時に家具も設計された可能性がある。その共通の意匠を比較してみる。

①柱・脚の条線文の意匠

1階ホール花台、食堂大型サイドテーブル、食堂テーブル、応接室サイドテーブル、

②葡萄の意匠

1階ホール花台、食堂大型サイドテーブル、食堂サイドテーブル、食堂カーテンレール支脚

③楕形文の意匠

1階ホールテーブル、1階ホール椅子(背もたれ)、応接室飾り戸棚、応接室花台

※壁の腰板、ドアと天窓の間にも取り入れられている。

④雷文の意匠

1階ホール椅子(肘掛先端部)、2階ホールソファーベッド(肘掛と脚の先端部)

※この他、雷文は1階寝室壁の木枠と照明器具金具、2階大広間床周囲木組模様、本館軒下回の模様に取り入れられている。

【柱・脚の縦方向の条線文の模様】



1階ホール花台



食堂大型サイドテーブル



応接室サイドテーブル



食堂テーブル

【ブドウの模様】



1階ホール花台



食堂大型サイドテーブル



食堂サイドテーブル



1階食堂カーテンレール

【楕形文・条線文の模様】



1階ホール椅子



1階ホールテーブル



応接室飾り戸棚

【楯形文・条線文の模様】(前頁からつづく)



応接室カーテンボックス



(上段)



(下段)

応接室花台



食堂腰板



応接室壁腰板



建物基礎石



玄関柱基礎石

【雷電文の模様】



1階ホール椅子(肘掛先端部)



2階ホールソファベッド(肘掛と脚の先端)



寝室壁木枠



2階大広間の床の周囲の組細工模様



建物軒下回



寝室照明器具の金具

⑤設計者と施工者

ア.室岡惣七について

西洋館の設計者は棟札の記載により室岡惣七である。彼は国重要文化財「旧遠山家住宅」の設計者でもあるが、どのような建築家かあまりわかっていない。現時点で最も詳しくまとまっている堀勇良『日本近代建築人名総覧』(中央公論新社、2021年)によると以下のようなようである。



室岡惣七

明治18年(1885)3月25日埼玉県入間郡堀兼村(現在の狭山市堀兼)生まれ、昭和26年3月15日没。大正2年(1913)7月に東京帝国大学工科建築科を卒業。3年5月に東京大正博覧会建築事務員(工事課勤務)となる。翌年から6年6月まで司法省大臣官房会計課営繕係となり、4～5年は甲府地方裁判所建築場、5年甲府地方裁判所建築場、5年長岡地方裁判所建築場、5～6年富山地方裁判所建築場に在勤した。6年6月から7年9月まで司法技師として松山地方裁判所建築場に在勤した。10年から15年まで(昭和2年までか)東京電灯株式会社の技師(営繕係長)となった。昭和2年(1917)5月に埼玉県浦和町に室岡工務所を開設(自営)した。特許や実用新案に、「印字速算機」「輪転『タイプライター』」「飛出シ玩具」「計算器」「中空壁ヲ構成

スヘキ筋違鉄筋ノ構造」「鍵無扉錠」がある。

室岡の著作として、雑誌『建築世界』に掲載した「大石窟旅館高荘館の記」、「建築の美的対衡大意」、「能率主義」、「雪と建築」、「若き自営の人へ」、「ムロオカ式木造計算器設計実例」。『建築士法成立に関する諸家の意見』(14年9月)、「遠山邸落成所感」(『東洋建築』昭和12年8月)や「落成所感」『遠山家本宅新築落成記念写真帳』(昭和11年)。没後、遺稿を元に刊行された『木造建築教本』(昭和26年)などがある。

代表作である遠山家住宅は、卓越した建築技術を駆使して建築された、極めて質の高い近代和風建築として価値が高い。平成30年に国の重要文化財に指定された。また、川島智生氏によると猪苗代第三・第四水力発電所は東京電灯株式会社で室岡が手掛けた鉄筋コンクリート造でドイツ表現派風の作品である。

県内に現存する奉安殿に室岡が設計したものが二つ確認されている。ひとつは、昭和11年設置認可の三保谷村立三保谷尋常高等小学校の奉安殿(現在は宮原神社内三保谷神社本殿・川島町)、もう一つは昭和15年設置認可の埼玉県立川越中学校の奉安殿(現在は下南畑神社本殿・富士見市)である。その他、個人住宅や病院などを設計したとされるが詳細は不明である。

西洋館の設計を室岡に依頼した経緯などは記録が無い。室岡の実家がある堀兼村と豊岡町が近いことから何かの関係があったと推測できるものの、直接的な係りは不明である。



(仮写真 旧遠山家住宅 HPより)

棟梁:中村清次郎(東京)

イ.棟梁 関根平蔵について



写真 関根平蔵

棟札より大工棟梁は川越の関根平蔵である。彼についても資料は少ない。『大衆人事録』によると、川越瀬尾町に土木建築請負「丸八」を営み、市議員を務め、川越製糸株式会社の監査役でもあった。また、関根家は親子三代にわたる大工で、父松五郎は、明治 26 年(1893)に焼失した川越市の「時の鐘」の再建(明治 27 年)を行うなど、様々な建築物を建てており、石川組製糸所川越工場の前身である御法川工場にも携わっている。

関根は丸八の社長として様々な建築物を残している。神社や祭礼の山車を建造するなど宮大工を得意とする一方、この西洋館をはじめとする洋風建築にも力を発揮している。また、現入間市内の学校建築も請け負っている。

和風建築では、川越市幸町の雪塚稻荷神社社殿とその社務所の建築、川越氷川神社祭礼(川越祭り)の山車の建造や改修(中原町の山車=昭和 23 年(1948)建造、幸町の翁の山車=大正 8 年(1919)大改修)を行っている。石川西洋館の 1 階応接室の格天井や 2 階貴賓室の天井などにも、宮大工としての技量を垣間見ることができる。

洋風建築では、丸栄呉服店や平蔵自宅を建築している(いずれも川越市)。特に、大正 14 年にできた自宅は西洋館の外観とよく似ている。川越市の都市景観重要建築物に指定されていたが令和 5 年 6 月に火災で焼失した。



写真 関根平蔵の住宅
(大正 12 年 9 月建築中)



写真 板倉家住宅

参考引用文献

- 文化財工学研究所(1999)「埼玉県入間市黒須西洋館建造物(旧石川組製糸西洋館)調査報告書」
- 藤森照信(1993)『日本の近代建築(下)―大正・昭和編―』岩波新書
- 安部清子(2003)「黒須・石川家西洋館付随の茶室」『入間市博物館紀要第 3 号』
- 染井佳夫(2011)「西洋館と石川組製糸をめぐる人々―新収史料紹介とともに―」『入間市博物館紀要 第 9 号』
- 三浦久美子(2019)「石川組製糸所本店工場想像復元模型の製作について」『入間市博物館紀要 第 13 号』
- 「西洋館と石川組製糸をめぐる人々」『入間市博物館紀要 第 9 号』(2011 年)
- 『石川組製糸ものがたり』
- 高松敬(令和 2 年)「建築家室岡惣七の著作について」『日本建築学会』
- 高松敬(2013)「蕨における奉安室と奉安殿の変遷」『蕨市立歴史民俗資料館紀要 第 10 号』蕨市立歴史民俗資料館
- 安部清子(2023)「西洋館から発見された掛軸とおもてなしについて」『入間市博物館紀要第 15 号』

原稿イメージ

→各項目をコンパクトにする

4 (4) 石川組製糸西洋館の本質的価値

- ① 明治中期から昭和初期にかけて全国屈指の製糸会社に発展した石川組製糸所（合資会社石川組）の貴重な建築遺構である。

埼玉県入間郡豊岡町黒須（現在の入間市河原町）出身の石川幾太郎が生糸の生産・販売を始めたのは明治 26 年である。当初は座繰製糸であったが、翌年、蒸気力による器械製糸に転換してこの地に本店工場を設け、共進社石川製糸所と称している。その後、日清・日露戦争後の好景気や、石川家一族挙げての協働もあって着実に業績を伸ばし、明治 35 年に豊岡町鍵山に第二工場を、同 40 年に川越町に第三工場を設置し、同 45 年には資本金 5 万円の合資会社石川組を結成している。さらに大正期に入ると、第一次世界大戦（大正 3 年～7 年）による好景気を背景にして工場を拡大し、入間郡内に 6 カ所、県外に 3 カ所の工場を抱える全国屈指の製糸会社となった。「西洋館」は、この時期すなわち石川組製糸所の最盛期に建設された同社の迎賓施設であり、現存する棟札によって、大正 10 年 7 月の上棟であることが判明する。竣工は大正 12 年とも云われており、その年、石川組は株式会社に改められている。

しかし、同年 9 月に発生した関東大震災で大きな損失を受け、その後の昭和恐慌や生糸相場の暴落などによって、石川組製糸所の経営は急速に悪化していった。さらに昭和 9 年 3 月には幾太郎が逝去している。株式会社石川組が解散したのは昭和 12 年、幾太郎が創業してから 44 年後であった。その後、石川本家は幾つかの事業を経営したが、石川組製糸所に関連する諸施設はすべて整理され、姿を消している。その中で唯一現存しているのが、同社の迎賓施設として建設された「西洋館」である。

- ② 大正期に建設されたタイル貼の木造洋風邸宅として極めて希少である。

現存する「西洋館」は、木造総 2 階建（一部地下室）の本館と木造平屋の別館からなる洋風邸宅であるが、石川幾太郎（社長）や長男の民三（2 代目社長）は、近接する本店工場の敷地内に住んでいたと云われている。従ってこれら 2 棟は、あくまで石川組製糸所の迎賓館（本館）と、その機能を支える付属建物（別館）として建設されたものであった。

大正 10 年に建設（上棟）された「西洋館」の大きな特徴は、本館も別館も外壁が濃褐色の煉瓦小口タイル（本館の一部は白色小口タイル）で覆われているという点である。当時はまだ「タイル」という名称は一般的ではなく、「化粧煉瓦」や「張付け煉瓦」などと呼ばれており、「西洋館」の棟札でも「張煉瓦」と呼ばれていた。「タイル」の名称に統一されるようにな

ったのは大正 11 年の平和記念東京博覧会の時からである。

わが国における外装用タイルの使用例は明治末期頃から現れ始めるが、当初は構造が煉瓦造か鉄骨造あるいは鉄筋コンクリート造の比較的規模の大きい建築に限られていた。「西洋館」で用いられている煉瓦小口タイル貼の早い例としては、旧盛岡銀行本店（明治 44 年、辰野・葛西建築事務所、重文）や東京駅（大正 3 年、辰野・葛西建築事務所、重文）が挙げられるが、特に東京駅の煉瓦小口タイル（品川白煉瓦株式会社製）は形状・寸法とも「西洋館」のものとよく似通っている。またタイル貼の迎賓施設あるいは邸宅建築としては、三井倶楽部（大正 2 年、コンドル設計）や旧島津家本邸（大正 6 年、コンドル設計、重文）、神谷伝兵衛稲毛別荘（大正 7 年）などが初期の例として知られるが、いずれも、「西洋館」ではごく一部にしか用いられていない白色小口タイル貼であり、前 2 例は煉瓦造、後 1 例は鉄筋コンクリート造である。

すなわち「西洋館」は、大正期におけるタイル貼の邸宅建築としても貴重であるが、特に木造のタイル建築としては極めて希少な遺構である。なお、木造の採用にあたっては、タイル下地に、通常より厚い木摺を斜めに打ち付け、鉄筋を挿入したモルタルを厚く塗ることによって、外壁の構造的な一体化を図っていることが特筆される。

- ③ 内外部の意匠や装飾によって、明治期のものとは一線を画した大正期ならではの斬新さを誇る洋風邸宅であり、特に本館の保存状態は良好である。

本館はほぼ西側を正面とし、中央に和風の意匠を採り入れた入母屋造の玄関ポーチを張り出しているが、屋根は洋瓦葺（当初は天然スレート葺）で、半切妻造の破風を周囲に配して表現派風のドーマー窓を設け、外壁を濃褐色の煉瓦小口タイル貼（一部の凹部を白色小口タイル貼）とした、洋風邸宅の造りである。しかし外壁には、明治期の邸宅建築を特徴付ける古典的な装飾（オーダーやアーチ、コーニス、ペディメントなど）は一切用いられておらず、平滑な煉瓦タイル貼の壁面に細長い窓を並べただけの構成である。その一方で、半切妻の破風や正面右側のベイ・ウィンドウ、1 階南側および東側の凹型テラス、さらに 2 階東側のバルコニーなどによって非対称なファサードにこだわっている点は、西洋のピクチャレスク（絵画趣味）の影響を感じさせる。

本館の北側に隣接する別館もまた同じ煉瓦小口タイル貼で、西側に半切妻の破風を見せるが、屋根は和風の棧瓦葺として本館との差別化を図るとともに、柱や横架材部分に人造石洗出しの白い帯を挿入してハーフチンバー風の外観を見せている。これもまた、ピクチャレスクの手法である。

内部に関しては、別館が二度にわたって大幅に改造されているのに対して、本館の主要室は創建時の状態を比較的よく留めている。

本館の内部は大階段を含むホールを中心として、1階に客室、食堂、寝室、応接室など、2階には貴賓室、大広間、和室（十二畳半）2室などが配されている。和室を除けば、基本的には洋風の造りであるが、外観と同様に明治期の古典的意匠はほとんど見られず、大正期になって導入され始めた西洋の新しい建築意匠（ゼツェッションやユーゲントシュティールなど）が目立っており、応接室や寝室、貴賓室などでは、天井廻りを中心に和風の手法や意匠が混在している。すなわち、斬新さと自由な和洋折衷が大正期ならではの邸宅建築を実現している。

棟札によると、「西洋館」の設計者は東京の室岡惣七、棟梁は川越町の関根平蔵であった。室岡は近隣の堀兼村（現、狭山市）出身で、大正2年に東京帝国大学工科大学建築学科を卒業し、司法省技師を経て、東京電燈株式会社の技師を務めた比較的若い建築家である。独立して（室岡工務所）本格的な建築活動を始めたのは昭和2年からである。関根は川越で土木建築業「丸八」を営む二代目の町場大工であった。石川幾太郎があえて著名な建築家ではなく、東京帝大出のエリートではあったが、地元出身の室岡と、町場大工の関根を選んだ真意は、明治期の華麗で豪壮な洋風邸宅ではなく、大正期の斬新な迎賓館を望んだからであろう。

④ 大正期以降、戦前前後を通じて入間市の近代を語る貴重な迎賓施設である。

石川組製系の発展に伴って、創業者の石川幾太郎のもとには多くの著名人が訪れたことが知られている。石川組製系の生糸はアメリカ向けの輸出が中心であったことや、幾太郎やその家族が熱心なクリスチャンであったことから、外国人実業家や宗教人、文化人たちを招く機会が多くなったことが、「西洋館」すなわち迎賓施設を建設する動機であったと考えられる。

「西洋館」には、幾太郎が逝去した後も、また石川組製系が解散した後も、多くの著名人が訪れたことが石川家に残る「芳名帳」（大正7年～平成10年）によって知られる。竣工後はキリスト教関係者や文化人が目立っていたが、昭和13年、この地に陸軍航空士官学校が設置されると現役軍人の来客が多くなり、同16年には士官学校長の宿舍として利用されるようになった。昭和20年の終戦によって士官学校はアメリカ空軍のジョンソン基地となったが、その直後から進駐軍の軍人たちが「西洋館」に訪れている。石川家がクリスチャンであったことや、他にはない本格的な洋風邸宅であったことが要因であろう。その後、昭和23年からは進駐軍に接收され、基地の副司令官をはじめ複数の将校家族の宿舍として利用された。その際、

別館内部が大きく改造されたが、本館に関しては、水回り以外は部分的な改造にとどまっている。そのため昭和 33 年に接收が解除されて石川家に変換された後も、本館はほとんどそのまま同家の迎賓館として利用され、進駐軍の軍人を中心に多くの来訪客を迎えている。「芳名帳」の最後の来客が平成 10 年であることから、「西洋館」はこの頃まで迎賓施設として**利用され続けた**。

「西洋館」が国の登録有形文化財になったのは平成 13 年、石川家から入間市に「西洋館」が寄贈されたのは平成 15 年である。その後「西洋館」は、本館屋根の改修工事が行われ、平成 30 年からは入間市の近代を語る貴重なモニュメントとして保存・活用が図られている。

5 基本方針

入間市にとって西洋館は、明治・大正・昭和初期にかけて、当地方を代表する会社として全国的に名を馳せた「石川組製糸所」が残した文化遺産であり、最盛期に建てられ迎賓施設として昭和12年に会社が解散するまで使われ続けた建物である。内部は進駐軍に改修された部分もあるが、外観を中心に当時の様子をよく留めている。

市民が地域の歴史を理解する上で、また地域への愛着を深めていくために貴重な存在である。また、現在も区画整理事業で整備が進む入間市駅北口や拡幅工事が終了した国道16号のランドマークとなっている建物であり、魅力ある観光資源のひとつとして、シティセールスの一翼も担っている。さらに、周辺には石川洋行事務所・蔵や新道の家、武蔵豊岡教会など石川組関連の建物がある。さらに、旧黒須銀行や繁田家住宅長屋門など近世・近代の遺構も残っている。

このことから西洋館を、入間市の歴史・産業のみならず、国内における製糸業の発展を理解するための施設として保存するとともに、建物の特色を生かした事業を実施することで、地域の活性化につながる施設として活用していくことが求められる。

これらの目的を達成するため下記を基本方針とする

- ・石川組製糸所の営業期〈大正10年(建築年)から昭和12年(解散)〉の姿として保存していく
- ・地域のシンボルとして市民に愛され、地域の活性化につながるように活用していく
- ・将来にわたり守り伝えていくべき貴重な文化財として必要な安全性の確保を図るとともに、適切な管理を行っていく